

第64回例会 国際会議「アジアの音楽情報と国際協力の推進：
音楽資料の調査と音楽図書館の連携」
IAML ライブツィヒ大会・日本支部総会報告

【目次】

第64回例会 国際会議開催趣旨	伊東辰彦 1
国際会議「アジアの音楽情報と国際協力の推進： 音楽資料の調査と音楽図書館の連携」統括	久保絵里麻 2
IAML ライブツィヒ大会に参加して	伊東辰彦 4
大会研究発表「1960-70年代における日本の音楽大 学附属図書館」概要と参加所感	伊藤真理 8
2018年支部総会報告	11
事務局だより	16

第64回例会 国際会議開催趣旨

伊東辰彦
(支部長、国際基督教大学)

第64回例会は、2018年6月16日国際会議「アジアの音楽情報と国際協力の推進：音楽資料の調査と音楽図書館の連携」として、池袋の立教大学を会場に開催された。その開催趣旨を、会議のホームページから引用する。「アジアにおける初の国際音楽資料情報協会 (IAML) と国際音楽文献目録委員会 (RILM) との合同会議である。各団体は、これまで国内の各種学術団体の協力の下に、音楽資料の収集および保存・検索提供、音楽情報に関する普及啓蒙活動、国際本部との連携作業を行ってきた。しかしながら、従来、この分野の活動は、直接関与する団

体内でのみ共有される傾向があり、それゆえに、例えば音楽資料の専門家の育成など、日本と共通の課題を抱えているにもかかわらず、それが共有されてこなかった。本会議の趣旨は、RILM 本部の所在地であるアメリカとアジア各国関係機関から講演者およびパネリストとして、音楽学、図書館学、文献学、社会学、文化政策研究などの専門家のみならず、音楽図書館で実際に職務にあたる司書を招聘し、こうした現状と課題について共有し、かつ会場全体で討議を行うことであり、各国関係機関や個人が、様々なレベルで将来の発展的な協力関係を構築するための有意義な場として機能することが期待される。」(出典後述)

こうした趣旨の下に、アメリカ、韓国、日本、香港から集まった発表者が、それぞれの意見を表明し、活発な討議が交わされた。会議の最後には、これからの活動方針として、次のような宣言が採択されたことを報告したい(原文英語)。「私たち IAML 日本支部会員は、音楽資料の管理、収集、普及に関わる他のアジア諸国の会員と、お互いの理解と協力を促進するために、より緊密な連携をもつ決意をここに表明する。私たちは、国境を越えてほぼ定期的に会合をもつこと、そして、会議以外の場においても、広い意味での、音楽資料に関する課題、その可能な解決、その達成、さらに、収集、保存、普及、そしてアクセスに関する地域的な問題につ

いての情報交流を確立することを希望する。」

会議開催にあたって、立教大学の国際学術研究交流制度国際会議助成を受けたことを記して、関係者各位に感謝したい。なお、この国際会議の概要については、今でもインターネットサイト (<https://iamlilrmrikkyo2018tokyo.jimdo.com>) で確認することが出来る。また、IAML 日本支部関係者には正式な報告書が送付された。ご一読いただければ幸いである。

(いとう たつひこ)



パネリストらと司会者

国際会議「アジアの音楽情報と 国際協力の推進：音楽資料の調査と 音楽図書館の連携」統括

久保 絵里麻

6月16日立教大学池袋キャンパスにて、第64回例会として開催された「アジアの音楽情報と国際協力の推進：音楽資料の調査と音楽図書館の連携」は、IAML 日本支部及び RILM (Répertoire International de Literature Musicale 国際音楽文献目録) 日本国内委員会合同の国際会議である。

本会議開催にあたり、RILM 本部の所在地であるアメリカから、RILM 会長バーバラ・D・

マッケンジー氏、RILM 編集主幹ズドラヴコ・ブラゼコヴィッチ氏及び、RIPM (Répertoire International de la Presse Musicale 国際音楽記事総覧及び記事索引) より業務副責任者ベンジャミン・クナイサク氏らを基調講演者として迎えた。また、パネリストとして、香港の香港浸会大学図書館司書・収集サービス課主任で RILM 香港委員長のケイティ・ライ氏、韓国より RISM 連絡委員会委員、IAML メンバーシップ委員 (2018年9月現在は委員長) のチャン・ジェンヨン氏ら、国内からは、IAML 日本副支部長伊藤真理氏、RILM 日本国内委員会事務局長関根敏子氏、RILM において iBis 入力チーム主任を務められている朝山奈津子氏を招聘し、筆者 (IAML 日本支部役員。2018年9月現在は事務局長代行) も登壇して、IAML 日本支部長および RILM 日本国内委員会委員長の伊東辰彦氏の司会のもとで会議が行われた。

開催趣旨は、伊東支部長が引用されているとおり (前記事) で、本会議の第一の目的は、関係者が実際に会って、会議の場のみならず、その後の発展的な交流を促すことにある。単純ではあるが、そうした中から各国が抱える問題点を共有し、あるいは解決策を見出していくこと、その端緒となるべくして開催されたのが今回の会議といえよう。初めての試みであるから、まずは、何処にどのような立場の人々が、どのような活動を行ってきたのか、といったことを現場の責任者から聞くことができただけでもかなりの収穫であったと感じているが、のみならず、RIPM について詳しく紹介する機会を得たのは実質的には今回が初めてであったというから、その点においては全ての参加者にとって有意義な内容であったのではないかと考える。

会議での講演・発表内容は、本稿が刊行される頃にはすでに IAML 日本支部会員に配布されている会議報告書に記されているので、そちらを参照されたい。ここではいくつかの論点を紹

介するにとどめる。

今回、討論のセッションにおいて話し合われた内容は、前記事にて伊東支部長がまとめておられるとおりだが、とりわけ時間が割かれたのが、「4）非西洋の音楽資料、特にアジアの資料のローマ字表記あるいは音訳化が必要であるかどうかについて再検討を要する。」という課題についてである。日本語のローマ字化にあたっては、ヘボン式・訓練式の他に、種々の読み仮名（音・訓読みや固有名詞等）の存在が大きな壁となって、効率的なデータ入力作業やその利用を阻んでいることが報告され（朝山氏）、また会場からは、RILMにおいて（ヘボン式でなく）訓令式を採用している理由についても質問があった。筆者はRILMデータ入力の経験はなく、また、これに関する知識は乏しいが、国際的な利用を目的としたデータベースを構築するにあたっては避けて通れない、決して小さくない問題であることを認識した。

韓国のチャン氏の報告に端を発して話し合われたのが、「3）大学生が音楽資料について学び、研究に活かすための、より良い教育制度が必要である。」という点である。

日本と同様、韓国においては「音楽資料」という概念自体が浸透していないという現状がある。学部生の場合、RILMなどのデータベースを利用するにしても、利用できるだけの知識が不足しており、検索することもままならない、あるいは、その存在も知らないということも珍しくないという。RILMでは、当然学部生の利用も想定してデータベースを構築しているということだったが、無論それらは西洋言語によるデータベースであり、母国語が非西洋言語である地域の学部生らにとっては、その利用自体が高いハードルを越えねばならないことを意味している。

このことは、「4）非西洋の音楽資料、特にアジアの資料のローマ字表記あるいは音訳化が

必要であるかどうかについて再検討を要する。」の項とも関連するが、どこまでをどのようにローマ字表記あるいは音訳化、または翻訳すべきかということを考えると、その線の引きはかなり難しいように思われる。学部生を想定したとして、例えば研究対象とする音楽資料が含まれている言語情報を除外して行われた（学位）論文を許容するのか否かという根本的な問題があるし、結局のところ、原資料を読み解く段階に至れば、研究対象の言語の習得が必須であることは明らかだからである。とはいえ、研究者がどの言語圏に属するかに関わらず、音楽資料にまつわる研究自体の促進を考えるならば、ローマ字表記あるいは音訳化は必須であり、その方法について検討が必要であろう。

音楽資料の専門家（司書等）の育成制度の不足は、韓国も、また、少々意外だったが、香港も我が国と同様である。このような問題を、会議中だけでなく、休憩中や夕食会の場においても登壇者らと話し、共有できたことは、筆者にとって大いに価値のあるものだったが、今回確認された課題をどのように解決していくか、ということが重要であり、具体的な解決策を模索していかなければならない今後の道のりは険しいものと思われる。

今後（特に）アジア諸国とのつながりを維持していくためには、ある程度定期的に情報共有の場を設ける必要があると考える。それは、今回のように実際に人が集まるという方法でもよいし、ウェブ上の集まりでもよいであろう。筆者は会議において、本年総会でIAML日本支部による正式な運営が承認された、Facebookグループ「音楽図書館」の運営に関する報告と、IAML日本支部Facebook公式ページの紹介を行ったのだが、これらの存在が本会議を機に（特に）アジア諸国とのつながりを構築する媒体となってくれるのではないかと願っている。

最後に、今後の本国際会議実行委員会の一員

として、報告と感想を述べたい。今回の国際会議開催にあたり準備されたのは、本会議専用のウェブサイト（日・英）および Facebook ページ（英）、Twitter アカウント（日）である。ウェブサイトは特に登壇者に対する案内の意味が大きかったので、英文を基本とし、それぞれ日本語ページに飛べるようにリンクを貼った。Facebook ページは、英文をメインとしたが、日本語で簡易な説明も付した。こちらは、RILM 本部や IAML 本部で記事をシェアしてくれたので、国外に対しての広報ができたほか、前述のウェブサイトの入り口としての機能を果たした。打ち合わせや会場下見などの様子など、準備段階などについても紹介していたのだが、これは一般に開かれた会議であることを印象付ける目的と、経過報告の意味もあった。最後に Twitter だが、こちらは設置が遅れはしたが、更新頻度を多めに設定したことで、興味あるユーザーにいくらかリツイートされた。試験的な試みとして、Twitter 上で、「#音楽資料のいろは」というタグで会議の広報だけでなく、IAML や RILM という組織の説明も掲載した。その他、当日までに、海外・国外招へい者の手配や、広報チラシの発送、会場の備品の整備などに追われる中で自分の力不足を痛感することばかりだったが、筆者と同様に、参加された方々にとって意義あるものであったことを願う。

1) <https://iamlrilmrikkyo2018tokyo.jimdo.com/>
(2018 年 9 月 20 日閲覧)

2) <https://www.facebook.com/IRR2018TOKYO/>
(2018 年 9 月 20 日閲覧)

3) アカウント：@iamlrilmjp2018

(くぼ えりあ)

IAML ライプツィヒ大会に参加して

伊東 辰彦

(大会代表出席者、国際基督教大学)

今年の世界大会は、2018 年 7 月 22 日から 27 日まで、ライプツィヒのメンデルスゾーン音楽演劇大学とライプツィヒ大学図書館を主な会場として開催された。22 日（日）夕方の開会式から 27 日（金）午後の閉会式までの 1 週間弱の間に、毎日複数のセッションが朝から夕方まで並行して行われ、極めて盛り沢山の内容であった。酷暑の東京と比べて幾分か涼しいのでないかと期待していたのだが、完全に裏切られ、ほとんど毎日暑い晴天に恵まれた。今回は、参加者が過去最大であったようで、ライプツィヒが会場であったこともあろうが、ドイツからの参加者が大変多かったようである（9 月 16 日時点での会計担当者 Kalk 氏からの報告によると、世界 38 カ国から 463 名の参加者）。



メンデルスゾーン音楽演劇大学外観

日本からの発表者は、IAML 日本支部の副支部長である伊藤真理氏だけであったが、一般参加者としては、荒川恒子（前支部長）、藤堂雍子（前事務局長）、那須聡子（RILM 日本国内委員会事務局）、田中伸明（レーゲンスブルク大学）、中村伸子（ヴィーン大学）の各氏と私が出た。配布された参加者名簿には、それ以外に、野口、藤永両氏のお名前があったが、お会いす

る機会がなかった（他に、IAML 日本事務局長代行の久保絵里麻氏が参加予定であったが、直前の体調不良のために参加を辞退されたのは残念であった）。それにもまして、去る6月16日に、日本のIAMLとRILMが共同して東京の立教大学で開催した国際会議「アジアの音楽情報と国際協力の推進：音楽資料の調査と音楽図書館の連携」の海外参加者全員（バーバラ・D・マッケンジー、Z. ブラゼコヴィッチ、B. クナイサク、J. Y. チャン、K. ライの各氏）とも再会し、友情を深めることが出来たのは幸いであった。こうした、地域での交流が定期的に行われていると、全体会議の場に出た時にも知り合いが多くなり、色々な場所で出会った時に自由に話が出来る機会が確実に増えることは大変に重要である。その意味でも、IAML 本部の役員や近隣のアジア諸国の会員との日頃の交流は、日本支部にとってこれからもっと活発にしていかなければならない課題であろう。

上述したように、ライプツィヒの大会では多くのセッションが毎日同時並行で行われており、個人として実際に参加出来たセッションはどうしても限られてしまったが、私が見聞したかぎりにおいて、どのセッションも充実した内容で、質疑も活発に行われていた（大会全体のプログラムについては、以下のインターネットサイトをご覧ください：<https://iamlleipzig2018.sched.com/>）。ここでは、個々のセッションや個人の発表のそれぞれについて詳しく報告する余裕はないが、扱われる題材や資料は様々であり、いわゆる音楽学的なテーマから図書館の実践的な課題に関するものまで、分け隔てなく論じられていたことが印象的であった。そこでは、自分は音楽学者だからとか、自分は図書館員だからと云うような先入観はもはや過去の無用の遺物であり、どのような立場であっても、お互いの仕事に関心を持ちながら、互いの信頼の上で協力していくことの重要性が共有されていた

のではないと思う。むしろ、そうしなければ、私たちを取り巻く多様に变化する音楽の課題に取り組んでいくことは、今後ますます難しくなっていくのではなからうか。インターネットやSNSの急速な普及と発展に伴って、音楽に関する情報が（良くも悪くも）グローバル化していく中で、IAMLと云う団体の持ちうる守備範囲の広さは、これからさらに有効な情報共有の機会を作る上で、重要な意味をもつのではないかと云う期待をもつことが出来た。IAMLの存在が、音楽に関わる多くの人々の間を繋ぐ仕組みとして機能し、現実の様々な課題を解決していくためには、既存の枠組みを超えて互いの知恵を共有していくことが不可欠であるとする認識が広まっていくことが望まれる。私たちが携わっている音楽と云う存在のもつ特徴である普遍性は、そのための題材として本質的に重要なものではなかったかと、300年程前にバッハが毎日の仕事をしていたライプツィヒの町を歩きながら、強く心に刻んだ次第である。



聖トマス教会

さて、組織としてのIAML日本支部にとって重要な案件をまず報告しておきたい。初めは、7月24日の午後2時から3時半まで、大学図書館内で行われた、各国のIAMLの代表者による会合（IAML Forum of National Representatives Working Meeting 2018）である。ハンガリー出身の副会長、B. ミクーシ（Mikusi）氏の司会で行われたこの会合では、まずは出席した各国の代表者の簡単な自己紹介

の後、IAML の新しいウェブサイトの現状紹介をかねて、顔写真やプロフィールの追加の状況、それに関わるプライバシー保護の観点（個人のメールアドレスを公開するか否かなど）、各支部の選択の余地や違いの許容、各国のホームページでの会議内容や情報紹介の状況が共有された。私の個人的意見としては、将来的には日本支部のサイトでの英語による情報をより充実させることで、海外との連絡をより活発にする必要があるのではないかとということであった。

次に、IAML の新しいプロシユアーを配布すること、個人に対する Fontes の電子化の普及の推進と、団体会員の扱いの違いに関わるいくつかの注意点、IAML の活動資金の調達や充実のために、国際レベル、及び各国レベルでの Development Committee を組織する計画について、国毎に税制が異なることなどの意見が聴取された。さらに、IAML の今後の活動方針、即ち、IAML として各会員の活動を支えるための方策、新たな会員を引きつける努力、会員が他の音楽関係団体と協働することの支援、IAML のユニークな歴史を保存し共有する計画、音楽図書館、文書館、音楽資料一般の保護を訴える努力について意見聴取がされた。それに続いて、各国のレポートの今年の編集作業の現状について報告があり、写真の貼付が可能であること、本部で準備したフォーマットを使っても使わなくても良いこと（困みに、私は、日本支部のレポート作成にあたってフォーマットを使ったが、便利であった）、1年毎の報告で良い（年中更新しないで良い）ことが確認された。最後に、前回のリガ大会からの議題だったが、大会の会期を短くするべきか長くするべきか、今のままの長さで良いかについて意見聴取がされたが、意見が分かれた。総じてどれも重要な課題であるが、どのように実現していくかについては、なかなか簡単に一つの結論に集約するのが難しいのが現状であるように思われた。

一方、IAML 全体に関わる議題が取り上げられた年次総会は、7月24日（火）の午後4時から5時半までと、27日（金）の午後3時15分から5時15分までの2回に分けて行われた（その詳しいアジェンダは http://www.iaml.info/sites/default/files/pdf/ga_2018_agenda.pdf をご覧ください）。今回何と言っても大きな出来事となったのは、長年事務局長を務めたスウェーデン出身の P. シェクター (Shekhter) 氏が、デンマーク出身の A. カト (Cato) 氏にバトンタッチしたことであろう。シェクター氏のこれまでの功績に対して、執行部全員から格別の感謝が寄せられ、会場全体からも満場の拍手が鳴り止まない程であった。私も今回初めて直接親しくお話しする機会が多かったが、その飾らない人柄と高い事務能力は IAML の原動力であったことを改めて実感した。



役員から Shekhter 氏へ花束贈呈

総会の議題は全部で 34 項目にわたる長いもので、その全体を詳しく紹介することはここでは出来ないが、まず、その前半の 18 項目が 24 日に扱われ、主に、執行部の各責任者、各委員会の責任者からの年次報告が行われた。その中で、上記の新しい事務局長の任命、2019 - 20 年の会費等についての説明と報告、27日に票決されることになっている、全体規約の一部改正と、Archive Committee と呼ばれる特別委員会設立についての説明と質疑応答が行われた。会場となったコンサートホールは満員で、古くからの会員も

新しい会員も混じり合って着席し、極めて友好的な雰囲気であった。

27日の会議は、議題の後半が取り扱われ、上記の2つの案件の票決、上記の各国のIAMLの代表者による会合の報告、4つのRプロジェクトの各責任者の報告などが行われ、最後に今後の世界大会の開催予定地、来年のポーランド、クラカウでの大会のプレゼンテーションが行われて、来年の再会を期して散会した。票決の内容は、IAMLの法律上の所在地をアメリカのA-R Edition所在地に置くこと、大会運営に関する事務局長のこれまでの役割を副会長に移管すること、各種委員会の委員の任期は3年であること（再選を妨げない）、など、実質上の運営においては、これまで通り、あまり影響の無いものであると理解した（票決に関する細かい説明については、以下のインターネットサイトをご覧ください http://www.iaml.info/sites/default/files/pdf/amendments_to_the_constitution_and_rules_of_procedure_2018.pdf）。

また、Archive Committee と呼ばれる特別委員会の設立も承認され、この委員会は、組織としてのIAMLにとって重要になるであろう、関連するあらゆる文書管理についてのガイドラインと手続きを見直し、デジタル化したIAML文書の管理担当者を決定する作業を、2019年のクラカウ大会までに完結することになっている。

ところで、私はRILM日本支部長も兼任しているため、職責として、27日（金）の午前11時から12時半まで大学図書館内で開催された、RILMのビジネス・ミーティングに出席した。その際、各国の代表が発言を求められたので、6月の立教大学での国際会議について報告し、その成果と今後の目標について報告した（この内容は、今号のニューズレターに掲載した）。司会のZ. ブラゼコヴィッチ氏からは、2017-18年に各国の支部からニューヨークの本部に送付された文献数のリストが配布された。こ

の資料は毎年この会合で配布されるものだが、国毎に活動の状況が如何に異なっているかということが、如実に分ることになる。関係しているスタッフの数もまちまちであり、また、送付した文献数が多いから良い訳では全くないが（ブラゼコヴィッチ氏談）、何千ものデータを送っている国の委員会と、委員会は存在するが、全く活動していない国もあるのが現状である。私個人としては、今後は、各国の委員会同士がもう少し横の連絡を意識して、お互いに情報や問題点を共有し、互いに助け合えるような制度を考えてみてはどうかと思っている所である。

同じ27日の午後2時から3時まで、副会長のJ. ハフナー氏が司会をする、Hot Topics と云うセッションがあり、日本の状況についての意見を求められていたので、私なりに次の6つの点にまとめて、文書を送付しておいた（原文英語）。1) 日本の経済的状況の悪化に伴う寄付や会員数の減少傾向はあるとは言え、若い図書館員を経済的、精神的に援助する方法を急いで見つける必要があること。2) IAMLの海外での大会に出席出来る関係者は限られており、ほとんどの参加者が経済的支援を受けることが出来ないため、全て自分で費用を負担しており、継続的関与が難しい。3) RILMに関して言えば、文献収集の協力者である大学院生、若い大学関係者たちは、安価な時給で仕事を強いられており、寄付等も減っている昨今、経済状況がこれからも悪化することを考えると、現在の送付文献の質と数を維持することが、近い将来困難になる可能性が高いこと。4) そうした状況を少しでも解決するためには、データソフト会社との連携をすることで、商業的な可能性を追求することも考えられ得ること。5) まだ4)の方向を取ることを決定してはいないため、支部長として寄付を開拓する努力を継続しているものの、それをする予算がある訳ではないので、行動範囲が限られてしまうこと。6) 全ては、現

在の日本の文化政策の貧困によるものであり、文化的遺産の重要性に関しての意識の低さや、政府の無責任な対応が、その背景にあること。残念ながら、この時間帯に、私個人の研究に関する所用があり、この会合自体には参加出来なかったため、どのような議論がされたのかは定かではないが、恐らくその結果として、今年度から、Advocacy Committee に加わることを要請され、受諾したところである。

最後になるが、ポーランド出身の S. フラビア (Hrabia) 現会長とは、色々な機会に直接話しをするチャンスがしばしばあった。彼としては、日本からの参加者、発表者が増えることを心から期待しているとのことであった。その意味で、来年ポーランドのクラカウで開かれる予定の大会 (2019 年 7 月 14 日から 19 日) には、より多くの日本からの参加者があることを強く望んでいるそうである。ポーランドも以前は参加者が大変少なかったが、関心を高めるための様々な活動を積み重ねた結果、今では、参加者がかなり増えたそうで、IAML 会長としては、日本の参加者が世界大会に参加する時には、要望があれば、所属機関の理解が得やすいように、所属機関の長に向けて、参加者の派遣を奨励する文書を送ることはやぶさかではないとのことであった。また、日本の情報がより正確に常に本部に伝えられることを望んでいるとのこと、私たち日本の関係者もその要請に応えなければならぬと思った次第である。

(いとう たつひこ)



Fairwell dinner にて

大会研究発表「1960-70 年代における日本の音楽大学附属図書館」概要と参加所感

伊藤 真理
(愛知淑徳大学)

本稿では、Forum of Sections 主催による "The Role of the Music Library: Past and Present" の部で発表した筆者と松下鈞氏による研究の概要と、大会期間中に参加した各種分科会から印象に残った事項などについてまとめる。なお発表資料は、IAML 本部のウェブサイト中のライプツィヒ大会のページにおいて、セッションごとにリストが作成されており (Materials presented in the sessions. <https://www.iaml.info/congresses/2018-leipzig>, 2018-09-24 閲覧)、筆者らの発表資料も掲載されている。ただし、会期中に行われたすべての発表資料が掲載されているわけではない。

筆者らの発表が予定された分科会では、Stephanie Merakos 氏 (Music Library of Greece "Lilian Voudouri", Athens) によるギリシャの音楽図書館でのギリシャ音楽アーカイブに関する発表 (当該録音・録画資料は Europeana でアクセス可能) と、Memory Apata 氏 (Dartmouth College, Hanover, NH) による公民権運動に関連した発表者の所属する音楽図書館での音楽演奏を通じた活動報告が行われた。音楽図書館の役割を、異なる視点から捉えるという面白い分科会であった。

筆者は、松下鈞氏とともに日本国内の音楽図書館の歴史を確認する作業を行っているが、この作業の過程で、1960 年から 70 年代については、音楽図書館がどのように発展してきたのか

について、未だ空白となっていることに気付いた。1960年代には各音楽大学が大学院を設置し、それに伴って附属図書館の蔵書が充実してきた時期であり、あわせて東京文化会館資料室の開室(1961年)、南葵音楽文庫の再発見(1966年)、遠山音楽財団附属図書室開室(現明治学院大学図書館付属日本近代音楽館、1966年)などがあった。音楽図書館の観点から社会的に興味深い時期であるといえる。

東京文化会館、南葵音楽文庫、日本近代音楽館については、それぞれに記念誌等が刊行されてまとめられている。そこで、筆者らは、音楽図書館協議会(以下、MLAJ)の主な会員でもある音楽大学附属図書館に着目し、当時どのような動きがあり、MLAJ発足に結びついていったのかについて研究することとした。ちなみに、戦前および音楽図書館協議会が発足した1971年以降については、MLAJによる詳細な調査とまとめが進められており、2018年末にはその40周年記念誌において成果が見られるであろう。

MLAJ発足に向けた動きを念頭に置き、研究対象は、国立音楽大学附属図書館、武蔵野音楽大学附属図書館、大阪音楽大学附属図書館とし、これらの機関で当時主に蔵書構築に関わった関係者に半構造化面接調査を実施した。大学以外の動きも確認するために、再発見当時の南葵音楽文庫の様子についても文献や関係者への面接調査で確認した。質問内容は、各館での蔵書構築、当時の音楽学研究コミュニティと音楽図書館の関係、MLAJに対する評価等についてである。

大学院設置を契機とした本研究対象館における蔵書構築では、主に研究者がその任を担っていた。図書館蔵書数の充実は、大学院設置基準の一条件でもあったため、ある意味で当然のことではある。けれども、蔵書構築のどこに主眼を置くかについては、各機関所属研究者の方針によって差があったことも確認できた。例えば、

武蔵野音楽大学においては貴重書、楽器コレクションに力点がおかれたが、国立音楽大学附属図書館では、大学で提供される教育内容に合わせた幅広い資料の収集が重視され、実用譜やファクシミリ版の購入が行われた。

適正な蔵書構成を検討することは、司書の専門的な業務なのだが、当時の音楽大学附属図書館では主に教員に依存していたといえる。そして、これらの活動の背景として、当時の音楽研究者らの選書能力が十分に育まれていたことが調査協力者全員から確認できた。選書を担当した教員らは留学経験者が多く、諸外国の図書館事情を把握していた。このことは、南葵音楽文庫が再発見され、日本音楽学会会員らが資料群を再評価する際に裏付けられたようである。

また教員による蔵書構築は、その財源として私立大学研究設備費補助金や科学研究補助金が適用されたことも影響があると思われる。1960年代は、文部省(当時)により、大学が研究教育機関として整えられることが強く求められ、そのための私立大学への支援も促進されていた。こうした社会的な背景も、図書館蔵書の充実につながったと考えられる。

こうして各館の蔵書が充実してくると、それらの資料を整理し、適切にサービスに供する必要性が高まる。当時の図書館職員らは自主的な勉強会(音楽図書館研究グループ)を定期的に関き、音楽分野の参考ツールについてや、音楽資料の分類のありかたについて検討した。その中心となったのが小川昂氏であった。当グループは、1972年にマコルピンを基にした音楽分類表を完成させた。この作業には、MLAJ発足メンバーらが関わっており、ある意味で音楽図書館間のネットワークの基盤が作られたと考えることができよう。

調査協力者らは一様にMLAJの活動を高く評価している。MLAJでは、発足以来音楽資料の総合目録の作成を積極的に行い、その結果とし

て加盟館の蔵書構成を共有でき、振り返って各館の蔵書構築への手がかりとなったようである。MLAJ の活動の詳細については上述の記念誌に譲るが、本調査によっても実証的に確認できたといえる。本研究ではさらに、1960-70 年代当時の研究対象館の蔵書構成等を確認して、面接調査結果の裏付け作業を行う予定である。

次に、筆者が関心を持っている Cataloging & metadata section の様子について少し触れておきたい。当セクションが主催する 2 回目の分科会 “Recent developments in music Cataloguing” では、3R プロジェクトに即した RDA Toolkit について、ドイツ語圏での統一典拠ファイルについて、フランス国立図書館での遡及プロジェクトに関する発表があった。1 つめと 3 つめ（スライドは英語、テキストはフランス語）の発表については、資料がウェブに掲載されているので、関心のある方は参照されたい。RDA Toolkit の改訂に関しては、様々なチャンネルから情報を得ることができるのだが、発表者も指摘しているように、RDA は既に国際的な目録コードとして認知されており、国際会議においても RDA Toolkit についての発表があることは好ましいと思われる。ドイツとフランスでのプロジェクトは、各国の動向としてどのような典拠レコードが作成されているのかを知ることができた良い機会であった。なお、第 1 回目の分科会 “Music and linked open data” には、他の分科会と重なって参加できなかった。セッションについて座長に確認したところ、発表者の一人である Kimmy Szeto 氏が本大会に参加できなかったこともあり、分科会全体についても情報を得ることができなかった。筆者が参加している当セクションのメーリングリストでは、一部の発表者の資料を閲覧できるものの、本部ウェブサイトの大会ページにも当該分科会の発表資料が公開されていないため、これ以上の情報が得られず残念である。

一般公開となっている担当者会議では、Library Reference Model を反映した ISBD 改訂の公表待ちであること、UNIMARC Medium of Performance Code と LCMPT のマッピングについて、BIBFRAME の状況についてなどが議題となった。ISBD に関連して、IAML から IFLA とのリエゾン担当者を立てるべきであるという意見が出され、本部役員会に提案することとなった。また、ドイツの目録環境について音楽目録での問題が詳しく紹介された。筆者から演奏手段のマッピングに関する件について、各支部がどのように貢献できるのかを質問し、当該プロジェクトを担当している Massimo Gentili-Tedeschi 氏に直接連絡を取ればいつでも参加・貢献できることを確認した。帰国後に早速調整を行っているところである。

最後に本大会で印象に残ったことを 2 点記す。1 点目は、大会初参加者向けのセッションについてである。筆者は今回初めて mentor 制度を利用して、2 名の mentees を引き受けた。そこで、初参加者が出席するセッションにも顔を出したが、このセッションでは IAML の組織、その中心的な R プロジェクト、大会の構成等をわかりやすく説明しており、初めての参加者でなくても大変有意義で、特に日本の音楽図書館関係者には紹介したい内容であった。時機よく那須聡子氏が日本語で記した IAML 組織図を情報提供してくださっており、当支部ウェブサイトに掲載予定である。IAML を効果的に紹介することの重要性を再認識した。

2 点目は、本大会では案内付きツアーが多く設定されていたことである。筆者は毎年参加するわけではないので、過去にもこのようなプログラムがあったかもしれないのだが、今回はドイツ語と英語で別々の時間帯にツアーが生まれ、大会会場となっていた Hochschule für Musik und Theater, Library and Historical Archive と Leipzig University Library の他に、German

National Library、Edition Peters、Manuscript room at University Library、Bach Archive、Library、German Central Library for the Blind、Public Library が協力した。多彩な分科会の合間にすべてのツアーに参加することは到底困難であり、大変残念だった。

筆者は、国立図書館やライプツィヒ大学図書館マニユスクリプトの特別公開と点字図書館、ペータースへの訪問に参加した。ライプツィヒ大学図書館貴重室でのマニユスクリプトの説明では、宗教改革以前にトマス教会で使用されていたとされるグラドゥアーレについての説明があった。当時の製本の様子やことばの使い方など、大変興味深かった。点字図書館では、点字や大型楽譜の作成の現場を視察することができ、これもまた興味がつきなかった。日本からもリクエストが来るそうである。

出版の街ライプツィヒで、ペータースの視察は感慨深かった。昨年の私的な当市の訪問では、グリークの居室しか見学できなかったこともあり、音楽出版社のオフィスを垣間見、さらにオーケストラ毎、指揮者毎に排架されている楽譜が並んだレンタルライブラリーを視察することができたのは、今大会参加の賜である。

筆者自身も今大会いおいても大変収穫の多い有意義な参加となった。伊東支部長も期待されているように、来年のクラカウ大会に、日本からの多くの参加があることを願っている。

(いとう まり)



ライプツィヒ大学図書館貴重書室にて

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部 2018年総会議事録

日時：2018年6月16日(土)午後1時～2時

会場：立教大学池袋キャンパス12号館2階会議室

出席者(22)：荒川恒子、伊東辰彦、伊藤真理、工藤哲朗、久保絵里麻、栗林あかね、田島克実、藤堂雍子、鳥海恵司、野川夢美、長谷川由美子、樋口美緒、平岩寧、星野宏美、宮崎晴代、森立子、柳澤健太郎、山田晴通、山本宗由、東京音楽大学付属図書館、桐朋学園大学附属図書館、株式会社トッカータ

委任状提出(40)：井上公子、小倉洋子、加藤信哉、金井喜一郎、金澤正剛、加納マリ、川村麻衣子、岸本宏子、久保田慶一、佐古純子、佐々木勉、佐藤仁美、佐藤みどり、澤田宏美、関根敏子、高橋美都、土田英三郎、寺本まり子、中西沙織、西巻悦子、羽柴明美、林伸二郎、樋口隆一、正木光江、美山良夫、村井範子、大和紘子、林淑姫、アカデミアミュージック(株)、上野学園図書館、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪芸術大学図書館、関西学院大学文学部美術芸術学専修、国立音楽大学附属図書館、昭和音楽大学附属図書館、同朋大学・名古屋音楽大学図書館、フェリス女学院大学附属図書館、民音音楽博物館音楽ライブラリー、武蔵野音楽大学図書館、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

会員総数(2018年5月末現在)：75(個人会員57、団体会員18)

*総会に先立ち、5月14日付で前事務局長から会員宛の一斉メール送付の際に起きたIAML日本支部会員の個人情報漏洩の問題に関して、支部長より謝罪。本件に関する対応を役員会に一任することが承認された。

<p>I 開会挨拶 支部長 伊東辰彦</p> <p>II 議長選出 荒川恒子氏</p> <p>III 総会成立の確認 出席者 22 名、委任状提出 40 名、合計 62。 会員総数 75 の過半数に達し、総会成立。</p> <p>IV 報告 1. 2017 年活動報告 (資料①)</p> <p>2. 2017 年会計決算報告並びに会計監査報告 (資料②)</p> <p>3. 会員の異動 (2018.6.16 現在) 2017 年 入会 板津昇龍氏、野川夢美氏 退会 柳原和音氏 細田勉氏 2018 年 入会 林伸二郎氏</p> <p>V 審議 1. 2018 年活動計画 (資料①)</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>1) Facebook グループ「音楽図書館」(非公開 グループ)の公開グループへの切り替え</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>2) IAML 日本支部公式 Facebook ページの 設立</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>3) その他 ①会員への緊急連絡方法：メールマガジン形 式を採用する</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>②支部ウェブサイト「入会方法」ページの簡 略化</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>2. 2018 年予算案 (資料③)</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p>	<p>3. Leipzig 国際大会代表出席者 支部長 伊東辰彦氏</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>4. IAML/RILM 国際合同会議開催にあたっての IAML (国際音楽資料情報協会) 日本支部による 公式声明文 (資料④)</p> <p>正文は英語がよいが、日本語も併記するよう意 見が出され、役員会で作成するよう一任された。</p> <p style="text-align: right;">【承認】</p> <p>VI 議長解任</p> <p>VII 閉会</p> <p style="text-align: right;">(文責・久保絵里麻)</p> <hr/> <p>資料④</p> <p style="text-align: center;">IAML Japan Mission Statement</p> <p>We the members of IAML-Japan hereby state our intent to be in closer contact with others in Asia concerned with the care, collection, and dissemination of music materials in order to facilitate mutual understanding and collaboration. We hope to organize cross-border meetings on a semi-regular basis and to establish communication between meetings to discuss challenges, possible solutions, achievements, and issues of regional concern regarding the collection, preservation, and dissemination of, as well as access to, music materials in the broadest sense.</p>
---	---

資料①

2017年活動報告および2018年活動計画

	2017年活動報告	2018年活動計画（中間報告及び予定）
国際大会	リガ国際大会2017年6月18日-22日 出席者:荒川恒子、栗林あかね、藤堂雍子、山本宗由 代表出席者:荒川恒子 発表:栗林あかね、山本宗由	ライブツィヒ国際大会2018年7月22日-27日 出席者(予定):荒川恒子、伊東辰彦、伊藤真理、藤堂雍子 代表出席者:伊東辰彦 発表:伊藤真理
総会	2017年6月3日(土) 場所:東京音楽大学付属図書館	2018年6月16日(土) 場所:立教大学池袋キャンパス12号館2階会議室
役員会	2017年1月24日(火)(東京文化会館応接室) 2017年6月3日(土)(東京音楽大学付属図書館) 2017年7月14日(土)(東京文化会館応接室) 2017年9月9日(土)(株式会社トッカータ)	2018年1月28日(日)(株式会社トッカータ) 2018年3月3日(土)(株式会社トッカータ) 2018年4月14日(土)(株式会社トッカータ)
支部例会・集会	第62回例会2017年6月3日(土)東京音楽大学付属図書館 シンポジウム「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムのデータベース構築にむけて」 パネリスト・児玉竜一(早稲田大学演劇博物館)、森本美恵子(明治学院大学日本近代音楽館)、遠藤淑恵、永井靖子(東京文化会館資料室)、鳥海恵司(株式会社トッカータ) 基調報告及び司会・林淑姫 第63回例会11月25日(土)東京音楽大学付属図書館 「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」山本宗由、久保絵里麻 司会・伊東辰彦	第64回例会2018年6月16日(土)立教大学池袋キャンパス12号館地下1階第1&2会議室 「アジアの音楽情報と国際協力の推進:音楽資料の調査と音楽図書館の連携」バーバラ・D・マッケンジー(RILM会長)、ズドラヴコ・ブラゼコヴィッチ(RILM編集長)、ベンジャミン・クナイサク(RIPM業務副責任者)、ライ・ケイティ(RILM香港国内委員会)、チャン・ジェンヨン(RISM連絡委員会、IAMLメンバーシップ委員会)、伊東辰彦(IAML日本支部長)、伊藤真理(IAML日本副支部長)、関根敏子(RILM日本事務局長)、朝山奈津子(RILM日本iBis入力担当チーム)、久保絵里麻(IAML日本役員) 第65回例会(未定)
ニューズレター	第59号2017年1月30日 特集 I AMLローマ大会 第60号2017年5月20日 美山良夫「南葵音楽文庫の和歌山県寄託をめぐって」鳥海恵司「音楽資源のためのジャンル/形式用語マニュアル」 第61号2017年10月31日 第62回例会「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムのデータベース構築にむけて」・総会報告 その他 オンライン版ISSN取得、第60号より表示	第62号2018年1月31日 特集 IAMLリガ大会 第63号2018年5月10日 第63回例会「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」 第64号2018年9月30日(予定)
ホームページ更新	ニューズレター掲載 No.59(2/28)、No.60(5/23)、No.61(11/23) 例会案内(4/9、10/25)、その他(11/2) 支部創設時に刊行された第1号(1979.6)を掲載(4/19)	ニューズレター掲載 No.62(2/22)、No.63(5/20) 総会・例会案内(4/24) 例会資料のページ新設(5/20)
選挙	日本支部役員選挙2017実施 選挙期間2017年3月17日-5月16日	—
その他	Fontesへの最新ニュース提供(3/23、8/10) 本部への会費送金(4/20)	本部への会費送金(5/2)

資料②

IAML2017年決算12月31日

費 目	2017年度		予算決算差額	備考
	予算	決算		
前年度繰越:				
現金	22,937	22,937	0	
ゆうちょ	365,818	365,818	0	
(内 会員会議参加補助基金)				¥227,000
三菱東京UFJ銀行	521,028	521,028	0	
(小 計)	909,783	909,783	0	
収入:				
未収会費				
2016年以前				
個人	18,000	18,000	0	
団体	0	0	0	
会費2017年				
個人	0	120,000	-120,000	
団体	0	28,000	-28,000	
利息	2	2	0	
会費2018年				
個人	336,000	198,000	138,000	個人 56
団体	266,000	224,000	42,000	団体 20
雑収入	0	0	0	
(小 計)	620,002	588,002	32,000	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
会員サポート・支部活動支援基金	50,000	105,340	-55,340	
(収入小計)	670,002	693,342	-23,340	
収入総額	1,579,785	1,603,125	-23,340	
支出:				
本部死会費送金	360,382	360,382	0	2990.40EURO/1EURO=127.92YEN
予備費	50,000	20,000	30,000	
経常経費:				
RILM分担金	80,000	80,000	0	
大会代表派遣費	100,000	100,000	0	
ニューズ・レター	60,000	51,160	8,840	
会議費、例会費	40,000	12,334	27,666	
交通費	100,000	37,037	62,963	
通信費	90,000	59,059	30,941	
消耗品費	20,000	2,797	17,203	
雑費	5,000	7,782	-2,782	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	24,624	376	
(経常経費小計)	530,000	374,793	155,207	
会員会議参加補助基金	100,000	100,000	0	
支出総額	1,040,382	855,175	185,207	
次年度繰越	539,403	747,950	208,547	

次年度繰越金	
現金	0
郵便局	308,330
(内 会員会議参加補助基金)	
銀行	439,620
総額	747,950

(¥127,000) IAML日本支部の2017年会計明細書を精査した結果、適切に処理、記載されていると認めます。

2018年5月7日
IAML日本支部会計監査

平岩 寧 

資料③

IAML2018年予算案

費目	2018年予算	2017年決算	予算決算差額	備考
前年度繰越:				
現金	0	22,937	-22,937	
ゆうちょ	308,330	365,818	57,488	
(内 会員会議参加補助基金)				¥127,000
三菱東京UFJ銀行	439,620	521,028	-81,408	
(小計)	747,950	909,783	-161,833	
収入:				
未収会費				
2017年以前				
個人	6,000	138,000	-132,000	
団体	0	28,000	-28,000	
会費2018年				
個人	0	198,000	-198,000	
団体	0	224,000	-224,000	
利息	2	2	0	
会費2019年				
個人	336,000	0	336,000	個人 55
団体	280,000	0	280,000	団体 20
雑収入	0	0	0	
(小計)	622,002	588,002	34,000	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
金	50,000	105,340	-55,340	
(収入小計)	672,002	693,342	-21,340	
収入総額	1,419,952	1,603,125	-183,173	
支出:				
本部宛会費送金	410,022	360,382	49,640	3068.80EURO/1EURO=133.61YEN
予備費	20,000	20,000	0	
経常経費:				
RILM分担金	80,000	80,000	0	
大会代表派遣費	100,000	100,000	0	
ニュース・レター	60,000	51,160	8,840	
会議費、例会費	10,000	12,334	-2,334	
交通費	100,000	37,037	62,963	
通信費	50,000	59,059	-9,059	
消耗品費	10,000	2,797	7,203	
雑費	5,000	7,782	-2,782	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	24,624	376	
(経常経費小計)	450,000	374,793	75,207	
会員会議参加補助基金	100,000	100,000	0	
支出総額	980,022	855,175	124,847	
次年度繰越	439,930	747,950	308,020	



事務局長交代および事務局住所の変更

会員のみなさまには 7 月 14 日付けでお知らせいたしましたように、このたび事務局長が交代しました。今期は、久保絵里麻氏が代行を務めることとなります。ご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

また、9 月 1 日より当支部事務局が変更（本ページ下方に記載）となりました。長年にわたり事務局を置いてくださった東京音楽大学付属図書館に心よりお礼申し上げます。

第 65 回例会のご案内

「日本目録規則」2018 年版が年内に刊行予定です。そこで今回の例会では、この新しい目録規則によって音楽資料の目録はどうなっていくのかについて、みなさんと一緒に考えたいと思います。根本的な考え方が変わったことや新しいことが多く含まれるため、内容を 2 回に分けて実施する予定です。みなさまどうぞふるってご参加ください。

なお、非会員も参加可能です。関心をお持ちの方をご存じでしたらぜひお声がけください。

テーマ 「新しい日本目録規則(新 NCR2018)

から見えてくる未来」

(株)トーハン 図書館ブックフェア 2018 特別セミナー)

日時 11 月 17 日(土) 13 時～16 時半

場所 株式会社トーハン本社 8F 大会議室
新宿区東五軒町 6-24

国立音楽大学附属図書館システム移行

国立音楽大学附属図書館では、これまで独自の図書館システムを運用してきましたが、今年 8 月に汎用システム(「ネオシリウス・クラウド」日

本事務器)に移行しました。移行にあたっては、目録と閉架書庫からの出庫のしゅみを維持するため、検討と調整を重ねてきました。目録については、今後も引き続き確認作業を継続していく予定です。

国立国会図書館遠隔研修 YouTube 公開

国立国会図書館では、遠隔研修の動画を同館サイトで提供していますが、3 月下旬より YouTube の同館公式チャンネル(<https://www.youtube.com/channel/UChpDnv60i1LxOszXgBSE7DA>)で公開が開始されました。本誌 59 号でお知らせしました「音楽資料概論—音楽資料とは何か」(講師伊藤真理氏)もこちらで視聴できます。

会費納入のお願い

10 月に会費納入の書類を送付させていただきました。支部運営のため、できるだけ早い納入にご協力を賜りますようお願い申し上げます。お問合せは、会計・宮崎までお願いいたします(haruyo12@imail.plala.or.jp)

第 64 回例会が国際会議として開催され、別途会議録が刊行されましたので、今号は、当該例会、2018 年国際大会、日本支部総会報告の合併となりました。

(編集部)

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 64 号

2018 年 10 月 20 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒4801197 愛知県長久手市片平 2-9
愛知淑徳大学人間情報学部伊藤真理研究室気付
<http://www.iaml.jp>